●トピック

入館者30万人達成

昭和62年（1987）に開館した大分市歴史資料館も、9年目の7月10日に30万人目の入館者を迎えることができました。30万人目の入館者になったのは、久土老人クラブ・潮風会の渡辺源蔵さんで、当日はクラブの皆さんと資料館見学に来られました。

30万人目の入館者を迎えるにあたり、資料館には、市議会文教常任委員長の日名子起美郎議員、同委員の三重野待子議員と釘宮由美議員も、お祝いに駆け付けていただきました。記念式典は、くす玉割りや花束贈呈、清瀬和弘教育長から記念品の贈呈など盛大なものとなりました。

歴史資料館も来年度は開館10周年にあたります。これからも、市民の皆様のふるさとの歴史に対する学習の場として、興味や関心をもっていただく企画を立て、たびたび足を運んでいただけるよう館員一同、努力するつもりです。

●行事案内

★秋季特別展

「米と日本人のくらし－平成米騒動・その原点」

開催期間　10月25日㈮～11月24日㈰

米を主食としてきた日本人の暮らしを、各地に残る、祭りや農具などの民俗資料で、見つめなおす。

★ふるさとの歴史再発見「民俗のコース」

日時　11・12月　第1・2・3土曜日
（但し11月は2・3・4土曜日）

定員　高校生以上　70名

内容　祭や口承文芸などの民俗事例を通じて、日本人の心象を学んでもらう。

★ミュージアムシアター（10・11・12月）

10月27日㈰「米と日本人」

11月24日㈰「木と家」「大阪－浪花繁盛記」

12月22日㈰「絵画に偲ぶ江戸の暮らし」「東京－大江戸の春」

●利用案内

★開館時間　9：00～17：00（入館は16：30まで）

★観覧料　大　人 200円（団体 150円）
小・中・高生 100円（団体　50円）

※市内の小学生は無料

※第2・4土曜日は小中高生とその同伴者無料

※団体は30名以上

★休館日　月曜日と祝日の翌日
年末年始（12月28日～1月4日）
特別展の前後（10月22日～24日
・11月26～28日）

★交通機関

○ＪＲ久大線　豊後国分駅下車　徒歩2分

○大分バス　国分新町行　歴史資料館前下車
向原行・今畑行・中村行
（以上の国分団地経由）
歴史資料館前下車

●編集後記

暑かった夏も終わり、秋の気配を感じる季節となりました。資料館ニュース36をお届けします。夏の間の資料館は家族連れの入館者やジュニア講座の小中学生・博物館実習の大学生などで賑わいました。これから秋にかけては資料館のメインイベントとも言える特別展開催に向けて大車輪となります。今回のテーマは「米と日本人のくらし」です。ご期待下さい。

資料館ニュース　No.36
発行　1996.9.30
大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎（0975）49－0880

大分市
歴史資料館ニュース
OITA CITY MUSEUM NEWS

賀来飛霞　植物

36
1996.9.3

夏休みジュニア歴史講座

8月7日から10日までの4日間、夏休みジュニア歴史講座を行いました。考古・歴史・民俗の各分野について、1日づつ体験しながら歴史を学ぶ講座で19人の小・中学生の申し込みがありました。

第1日目は弥生土器の洗浄と復元。参加者は土器に触れるのは初めてで、遺跡から出土した土器をブラシで洗い復元し、一日考古学者の気分を味わいました。2日目は、昔の明かりと遊びをテーマに、ロウソクや菜種油に火をともし、明るさを体験するとともに、その明かりを利用して、影絵遊びを行いました。3日目は土器づくりに挑戦。粘土をこねて柔らかくし、器を作り、その表面を縄文土器の文様や、弥生土器の文様で飾りました。土器作りのむつかしさが良くわかりました。最終日は民具コーナーに展示しているむかしの道具を、それぞれスケッチし、いつ・何のために・どのように使ったかをみんなで考えました。

こども達は、初めて体験することばかりで、教科書とは違う歴史の学習に、興味を持ってくれたようです。来年もさらに工夫し、大分の生活や歴史に触れることができる講座にしたいと思っています。

土器の復元

影絵あそび

●表紙紹介

賀来飛霞植物図

豊後高田生まれの本草学者賀来飛霞（1816〜1894）が「嘉永五（1852）秋九月」に描いた「オホバガシ」の写生図です。「ハビロガシ」とも記されていますが、一般には赤樫の名で知られているものです。

彼は、島原藩医賀来有軒の三男として生まれ、はじめ日出藩の帆足万里について医学・薬学を学びました。天保5年（1834）京都へ行き、本草学者山本亡羊に師事し、以後本格的に本草学の研究を行います。かたわら杵築藩の十市石谷に絵を習い、花卉図では師石谷を上回ったと言われています。明治11年（1878）には当時東京大学理学部員外教授であった伊東圭介の招きで小石川植物園植物取調掛となり、伊東と共に『小石川植物園草木図説』巻一の刊行を行っています。

「あかがし」について白沢保美著『原色精密日本森林樹木図説』（昭和58年刊）では、葉の「表面は晴緑色、裏面は淡黄緑色を呈する」「果皮は数条の縦紋があり、総苞は深い椀状で、6〜7個の輪層があり」と解説されています。本図は、こうした特徴を的確にとらえており、飛霞の観察眼の高さがよく分かります。

（紙本著色：本紙 縦26.7㎝×横34.4㎝）

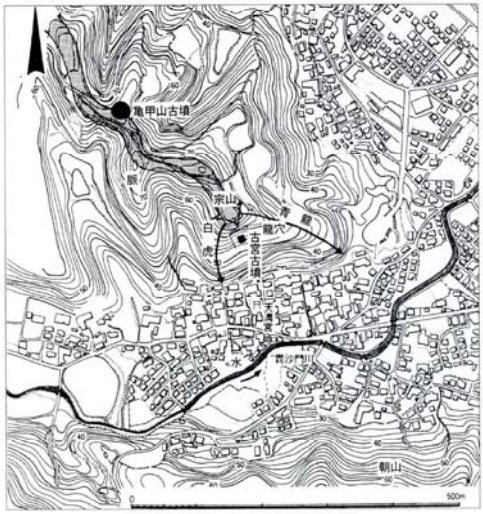
古　宮　古　墳

古墳時代のコーナーに、ケースに入った古墳の模型があります。斜面に方形の墳丘をもち、横穴石室がある古宮古墳の1／10の模型です。石室は忠実に縮尺して作成していますが、墳丘は模型作成時点での推定復元です。石室の構造が分かる様になっていますのでよく見てください。手前の部分は普通古墳で見られるように石を組み合せてありますが、奥（玄室）は一つの大きな凝灰岩をくりぬいていることがわかるでしょう。このような構造の横口式石槨は九州では他に例は無く、全国的に見ても類例は多くありません。このような古墳は、奈良県高松塚古墳と同じく終末期古墳とされています。

古墳の築造年代は出土した須恵器によって7世紀後半代と推定されていますから、ちょうど年代は大化薄葬令（646年）以降で、古墳はあまり造られなくなる時代です。古墳の盛土の規模（推定値）は平面が12.45×12.15m、高さ4.9mで、ほぼ方7尋、高3尋に近い数値となります。これはちょうど薄葬令による上臣の墳丘規模に担当します。薄葬令には、夫王以上、上臣、下臣、大仁・小仁等から庶民までの各クラスの墓の規模が定められていました。したがって、古宮古墳に葬られてた人物は上臣クラスにあたり、石室の構造からしても「律令体制下の高級官人」と推定されます。

「日本書紀」天武天皇条に、この時代に大分君恵尺・稚臣が壬申の乱で活躍し、天武4年（675）に死亡した恵尺に外小紫位、天武8年（679）に死亡した稚臣に外小錦上位が追贈された事が書かれています。この大分君がただちに豊後国の大分郡に勢力をおく有力豪族と考えることは出来ないようですが、きわめて可能性は高いようです。それからすれば古宮古墳の被葬者は大分君恵尺あるいは稚臣のどちらかである可能性がでてきます。しかし、恵尺の冠位はいいのですが、稚臣の追贈位は大仁に担当し、古宮古墳クラスの墓は造れない事になりますので、恵尺の墓の可能性が高い事になります。

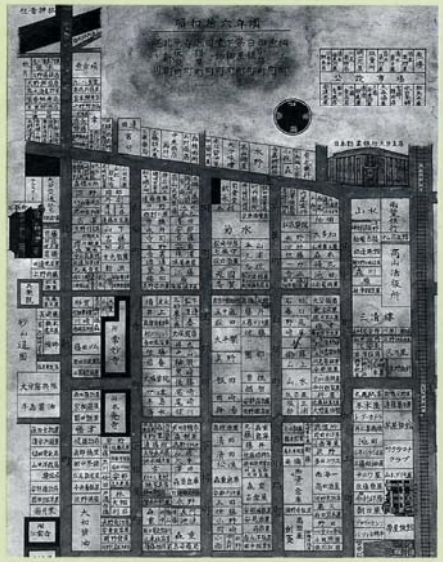
この古宮古墳は模型では分かりませんが、市内三芳宮畑の現地や地図を見れば、それまでの古墳の立地と大きく異なることが分かるでしょう。幅の狭い丘陵の先端、しかもその先端の急斜面に造られているのです。このような立地の古墳は同時期の古墳に多く見られ、風水思想にもとづいて造られているのです。古宮古墳を風水で解説してみましょう。まず背後のうねうねと伸びて来た丘陵は祖山から伸びた龍脈で、その先端に一番「気」が溜まる龍穴があり、∩形に斜面を造成して“龍穴”を明確にして、そこに古墳を造っています。その背後を“宗山”といい、そこから東に伸びる稜線を“青龍”、西に伸びる稜線を“白虎”といいます。さらに古墳の前を西から東へ丘陵先端を取り囲むように流れる毘沙門川を“水”といいます。以上のように古宮古墳は風水思想で造られていたのですが、残念ながら開発工事などによってその面影はほとんど失われてしまいました。なお古墳本体と龍穴部分は史跡として保存されています。



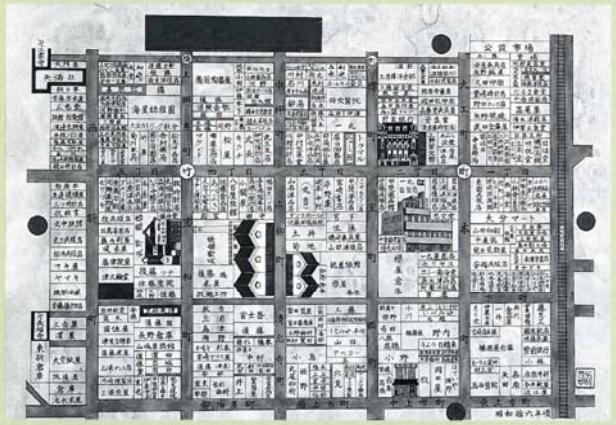
風水思想から見た古宮古墳

昭和20年夏 町が消えた

昭和20年７月16日午後11時過ぎ、アメリカ軍のB29１機が大分市上空に侵入、照明弾を投下。その後、２～３分おきに2、3機が来襲し、焼夷弾をばらまいていきました。空襲の時間は約１時間半にわたり、アメリカ軍発表によると127機が焼夷弾100個を投下しています。日本側の記録では約30機が約6000発投下となっています。大きな差がありますが、１個の焼夷弾は上空で数十発に分散するので、約6000発という数字も間違いとは言えません。この大空襲の被害は、全焼家屋2358戸、半焼130戸、死者49人、負傷者123人、被災者約１万人にのぼりました。大分市の中心部は焼き尽くされ、「大分駅から浜町の海が見えた」ほど建物がなくなりました。まさしく一夜にして町が消えてしまったのです。今回は、この時消えてしまった町を加藤貞弘氏が復元した絵図を紹介します。

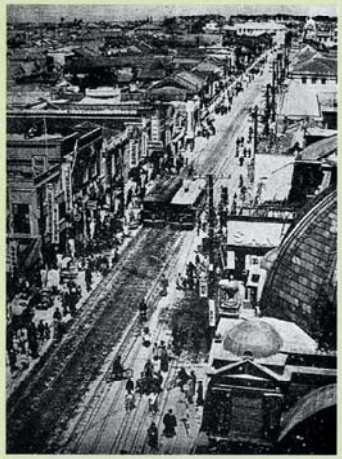


①



②

③



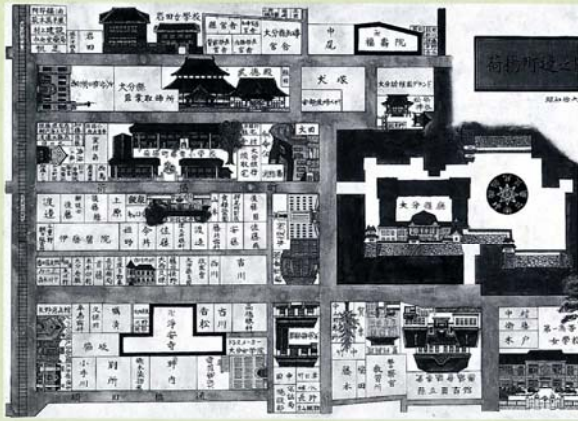
▲終戦直後の電車通（現中央通）

◀戦前の電車通（２点とも「大分市勢要覧1950」より）

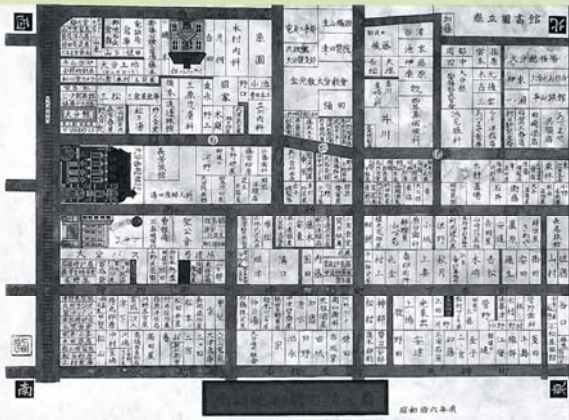
戦火で消えた大分市中心部復元絵図

この絵図は、加藤貞弘氏（旧大分市鍛冶屋町生）が昭和20年の大空襲で焼き尽くされた大分の町を復元し、日本画家の首藤詔子氏が描いたものです。戦後30年をきっかけに作業を開始し、４年をかけて昭和54年に完成しています。作成にあたっては、昭和15、16年の町並みを基準に、当時住んでいた人から聞き取り調査を行い、その記憶から居住者名、商店名などを確定していく作業を積み重ねたそうです。ただ、30年以上も経過し記憶も薄れており、名前がわからなかったりその町内に住んでいたことはわかっても、場所がはっきりしなかったこともあり、まったく当時のままではなく、加藤氏自身確実なところは８割と言われています。また、測量を伴う地図ではないため、作図の関係から店舗や屋敷の広さは正確ではないそうです。市販されていた昭和10年前後の市街地図も残っています。しかし、それでは町名や区画はわかるものの、商店や居住者の名前まではわかりません。また、当時の写真はあまりなく、建物の外観を知ることができる資料が少ないのが現状です。その中で、町を代表する建物が描かれ、商店居住者名が細かく書き込まれた、この絵図は、戦災で消える以前の姿を私たちに十分教えてくれます。

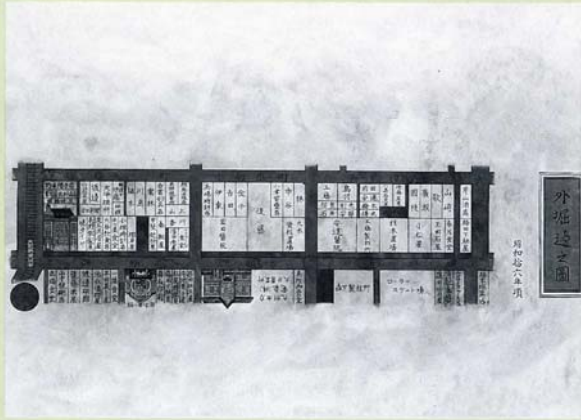
参考文献 加藤貞弘著『戦火で消えた大分市中心部復元絵図』（1979年刊）
当館蔵



④



⑤



⑥

①細工町から堀川付近（現都町）
②竹町・本町付近（現中央町）
③駅前西光寺付近（現末広町）
④荷揚町付近（現荷揚町付近
⑤南新地桧物町付近(現府内町付
⑥外堀辺（府内町1丁目付近）

テーマ展

大分ゆかりの人物展

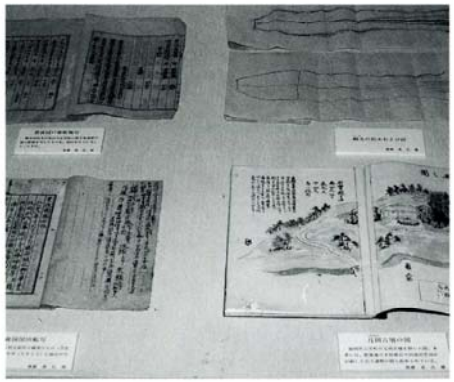
期間　平成8年7月6日～9月29日

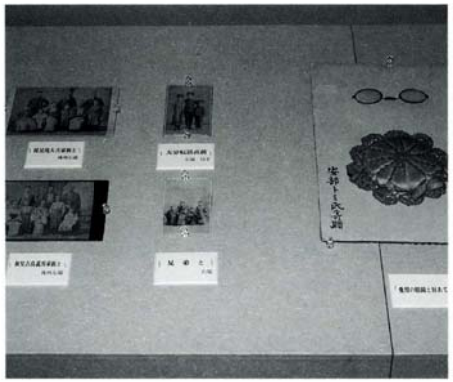
今年第2回のテーマ展示「大分ゆかりの人物展」を7月6日（土）から開催しました。本テーマ展示では、大分市に関わりの深い、松平忠直（1595－1650）・後藤碩田（1805－1879）・滝廉太郎（1879－1906）の三人の人物について、遺品等の関連資料の展示を通して、その足跡や業績を紹介してみました。

まず松平忠直ですが、菊池寛の小説「忠直卿行状記」でご存知の方も多いと思います。徳川家康の次子結城秀康の嫡男として生まれ、父の死後、越前北ノ庄藩（後の福井）68万石の城主となりますが、乱行を幕府に咎められ、元和9年（1623）豊後萩原村（現大分市）へ流されました。その後、寛永3年(1650)56歳で亡くなっています。本コーナーでは、彼が生前崇敬した津守の熊野神社に伝えられている①三葵紋鏡（「天下一木瀬浄阿弥」銘、「天下一浄慶」銘の2面）や、②葵紋入りの柄杓、③梨子地巴葵紋蒔絵鎧、④五三桐の紋を施した轡、⑤能面（小面と小見の2面）や、⑥忠直が寛永5年に寄進したと伝えられる「熊野権現縁起絵巻」などを展示しました。

次の後藤碩田は、大分の歴史・考古学の先覚者として知られている人物です。彼は、大分郡乙津（現大分市）の裕福な商家に生まれ、14歳の時に学問を志し帆足万里・渡辺重名・長瀬真幸の学者らに師事しました。特に歴史・考古学に強い関心を示し、各地を遊歴し精力的に史・資料の収集を行い、後にそれらを「碩田叢史」と名付けた500冊余の書物にまとめ上げました。そこに収められた内容は、郷土大分の歴史研究に欠かせない史料として今日も利用されています。本コーナーでは、①碩田の画像をはじめ、彼の研究書ともいうべき②豊後国図田帳考証草稿や、研究史料として集められた③豊後国図田帳写、④月岡古墳の図、⑤銅戈の拓本などを展示しました。

最後に、明治36年父母の住む療養先の大分で23歳の若さで亡くなった滝廉太郎について、①直筆楽譜「花盛り」、②同「海邊納涼」、③愛用の眼鏡・肘あて、④明治35年留学先のドイツから日本に帰国した際に叔父夫婦にあてた直筆の書簡や、⑤兄弟で一緒に写った廉太郎幼年期の写真、⑥東京音楽学校在学中の頃の写真、⑦ドイツ留学中に撮った写真の遺品等をしました。





資料紹介

大分市横塚第2遺跡出土の土偶

大分県教育委員会が1995年12月に行った横塚第2遺跡（大分市大字里字王ノ瀬）の発掘調査で、縄文時代後期（約3,500～4,000年前）の土偶が出土しました。土偶とは縄文時代につくられた小形の土人形で、当時のお祭りやお祈りに使われたと思われる祭祀の道具です。横塚第2遺跡の土偶は残存長4.1㎝、最大幅4.9㎝、厚み0.7㎝で、下半身の部分はすでに失われていました。本来は分銅の形のような平面形態をなしていたと推定されます。

土偶は頭部や手足が省略されており、胸の部分には乳房の表現がみられます。お腹の部分には女性の妊娠線（あるいは生命線）と思われる沈線があり、また乳房より上の上半身の沈線は衣服の文様や入墨である可能性が考えられます。この沈線が衣服の文様であるとすれば、衣服を着ているのに裸のお腹の妊娠線が見えていることになり、矛盾しているように考えられますが、このような表現法は先史時代の芸術品に一般的にみられる技法です。（エックスーレイースタイル、すなわちX線技法と呼ぶ学者もいます）。入墨であれば裸の上半身を表現していることになり、矛盾はありません。土偶の表面には、表裏面ともに赤色顔料が塗られた痕跡がありますが、すでに剥げ落ちています。

土偶とともに出土した土器には福田KⅡ式あるいは宿毛式と呼ばれる縄文時代後期前葉の土器があり、土偶の年代を暗示しています。九州地域においてはこの時期の土偶は極めて少なく、大分県下では今のところ最古の土偶となります。このような形をした土偶は大阪府仏性寺遺跡・岡山県福田貝塚・山口県神田遺跡などにあり、主に近畿・瀬戸内地方で流行した型式です。九州地域でもかなり古い時期に比定される土偶が、近畿・瀬戸内地域の土偶の形と共通していることは、当時の文化相を考える上で大きなヒントとなります。

横塚第2遺跡で出土した土偶は、九州の土偶の系譜や展開を考えるうえで、今後の研究で非常に貴重な資料になるであろうことが予測されます。

（大分県教育庁文化課　吉田　寛）

横塚第2遺跡から出土した土偶